すみれ亭句会　会報　６０（平成二十二年十月十五日）

百花逍遥　　倦鳥　選・評

（講評）

日本の詩歌の本質は「他と和する」ことであるという。ただし和するということがただ単に同調することを意味しているのでないことが重要である。人と人も、人と鳥獣虫魚も、人と地水火風も、人と山川草木も、すなわち人と宇宙そのものが、和するという状態になりえたとき、そこに詩歌が誕生する。（大岡信）

さて和するとは対象とベタベタすることではない。例えば対立、揶揄、無視することを通じてですら和することができるのである。

朝顔に我は飯食う男かな　　芭　蕉

数ある芭蕉の句の中でも、私はこの句が好きである。ぶっきらぼうでまるで世の中に怒っているかのごとくである。本音だけをズバリと表現し、自分を揶揄している点に惹かれるのである。

俳句とは本来無口なものである。一般的に「平成の俳句は饒舌に過ぎる」と言えようか。散文全盛の時代相を反映しているのであろうが、言わずもがなの事象を「言挙げ」しすぎる点自省する必要があろう。

吊革の先に大島秋澄めり　　マ　サ

俳句で大切なことのひとつに、「一句のなかでものの対比のあること」というのがある。遠近、大小、新旧、永遠と刹那等々。これらの対比が句の深さ、奥行きとなる。

マサさんのこの句はその意味で、吊革という日常、大島という非日常の風景、形の上では小と大、時間的には刹那と永遠との対比がないまぜになって「秋澄む」という季語の本意に迫った結果、秀句となって実った。

蚯蚓鳴く幽霊坂の闇夜道　　西　風

西風さんはいったい何の必要があってこのような、闇の幽霊坂などを上っているのであろうか？この疑問が本句を支配する通奏低音である。加えて蚯蚓まで鳴いているという舞台設定も手がこんでいる。

悪魔のメフィストフェレスに魂を売ってしまったファウストは、こうした闇路をたどって恋人マルガレーテの許に通い詰める。そして挙句の果ては？

ふるさとも夜長なるらし長電話　　しろう

別項「鳥兜の森」の作例をご覧になるとお判りの通り、「夜長」の本意は複雑多岐にわたる。物理的な時間の長さをいうのなら冬至前夜にはかなわない。うらうらとした秋の昼に対する、秋の夜のしみじみとした時間経過がポイントである。でなければ、しろうさんのこの作品も全く当たり前の「ただ事」に堕してしまう。

ふるさとへの電話であるが故に、湿った情緒がからみつき思わぬ長電話となる。

太白の一点白き秋の空　　弓　人

太白は金星の中国名。子供のころからお馴染みの宵の明星（一番星）としてほぼ日没頃に見えはじめる。例えば、十月二十一日の日没は午後四時五十九分。しかしそれ以前の時刻の太白は、すでに白く夕空に出ているはずである。発見の妙。

友逝きてコスモスひとり眺めおり　　慶　子

日本人の多くに好まれるコスモスは、秋桜ともいい、どちらかといえば乾いた情緒を有する花であろうか。芯が強く、強風にもよく耐える。花言葉は「乙女の純潔」。

夭折した親友に寄せる想いが「ひとり」により増幅されるのである。

彼岸花体内時計狂いなし　　晶　子

いわゆる曼珠沙華であるが、ことしの異常な暑さが影響して、一時期開花の遅れが予測されたのであった。それが、文字通りお彼岸の時期になると申しあわせたように各地で一斉に開花することとなった。自然の妙、体内時計の不思議。

目覚めれば一足飛びに今朝の秋　　黄　雀

本来今朝の秋とは立秋を指すのであるが、本句の場合は少し異なる。単純に突然の秋の訪れに愕いているのである。

「一足飛び」という平語がじつに共感をもって効果的に響くのである。

秋の蚊や人生賭けて襲い来る　　清　龍

水中のボウフラの時期を含めても蚊の一生は旬日に満たないであろう。秋の蚊は時期外れゆえに哀れである。反面執念深い。彼らの全人生を賭けて襲ってくるという清龍氏の主張が面白い。ちなみに血を吸うのはメスとされている。

長旅を終えて我が家の麦茶かな　　智　昭

どのように風光明媚な観光地を旅行し豪華この上ないホテルで美食の贅を尽くしても、いつかはそれが疎ましく思えるときが来るのは必定。

「キミの麦茶は世界一だよ」と奥様にのたまう某氏の声が聞こえてくるようである。

台風を慈雨と思うか大旱　　靖　　目

台風が文字通り「干天に慈雨」となってくれた有難さ。とくに今年はどなたも同じ。

白桃がコンガリ焼けて胸にある　　豊　嗣

豊嗣氏の哲学的観察の結果である。「白桃がコンガリ焼ける」とは前代未聞。

ありがたや今年も食らへし秋なすび　　信　貴

「秋なすは嫁に食わすな」とふるい俚諺。だが信貴氏もそれほどまで五執心とは。

日が暮れて秋刀魚に酢橘燗の酒　　藤　則

「秋刀魚に酢をしたたらすはいずくのならいぞ」。兎も角美味いの何のって。

津波来て子の頬光る秋の月　　冬　草

今年も世界各地で天災の絶えることはなかった。親を喪ったたくさんの子供たち。

歓声につられてのぞく運動会　　満紀子

これは普遍的な心理をうまく突いた。知らない町でも覗きたい衝動に駆られる。

行く秋や胸の谷間の夢失せる　　善　啓

これはまた意味深長な一句である。胸の谷間に何を夢見たのか大きな謎である。

我庭も神の御業や神無月　　和　代

「神さんたちは出雲へ行かはったのに柿の実だけは手配してくれはったんやなあ。」

名月や声かけ合うも相知らず　　雅　子

お月見の夜は、誰でも挨拶し合う。心が広く豊かになっているのである。

栗弾け森の栗鼠ども逃げ惑う　　河　童

今年は猛暑で硬い木の実は不作。だがこの栗鼠君たちは幸せそのもの。

鳥兜の森（兼題「夜長」）　　西風　選・評

（講評）

本年の夏は記録的な猛暑と熱帯夜が続きましたが、何方かの句にもあるように、「一足飛びに」秋の到来です。今回の兼題は「夜長」と決めさせていただきました。句会の皆様からの句も、夜長を読書や秋の虫の鳴き声を楽しんだり、長い人生の来し方を回想したり、友情を深めたりされている様子が窺えました。

お茶菓子をそつとまた足す夜長かな　　しろう

日常生活のとても身近なことながらこんな素敵な句がすうつと詠める技に感動しました。選句で圧倒的支持があったのも当然です。

ただ、なるほど、うんうんと唸るだけです。

寝返れば夫も寝返り夜長かな　　雅　子

熱帯夜で眠れないときの句でなく夜長の句にでてきたので意味深です。しかし、夫　婦想い悩みなど共有して眠りの浅い夜はあるものです。

思い当たることが皆様にもお有りでしょう。

秋の夜灯りの先に家族あり　　智　昭

秋になると釣瓶落としのようにストンと夜が来ます。気候も温暖で家族が楽しく寛いでいる様子が歩道から垣間見えることがあります。明るい家庭が詠めているように感じます。

（あとがき）

漠然と季節の情緒にもたれた作品、季重なりが散見されます。御健吟を！

倦鳥